

第2回（仮称）札幌市映像基本計画検討委員会 会議概要

1. 日時

平成27年11月25日（水）16：00～18：30

2. 場所

札幌市役所18階 第三常任委員会会議室

3. 出席者

(1) 委員

伊藤委員長、樋泉委員、津嶋副委員長、山野委員、中島委員、鈴木委員

(2) 札幌市職員

経済局長、経済局国際経済戦略室長、経済局国際経済戦略室コンテンツ産業担当課長 ほか4名

4. 次第

(1) 開会

(2) 議事

ア 「映像のまち条例」に基づく基本計画の策定について

イ その他

(3) 閉会

5. 会議概要

(1) 委員自己紹介（前回欠席者）

【山野委員】 山野です。北海道映像産業振興連盟（HFA）という NPO 法人の代表理事をやっている。また、40年以上俳優業をやっていて、テレビや映画などに出演している。現場からの視点で意見を出せればと考えている。

(2) 「映像のまち条例」に基づく基本計画の策定について

第1回目の議論を踏まえ、事務局から議事の関連資料について説明を行った。

(3) 各委員からの意見

【中島委員】 「映像」の範囲をどう考えるのか、委員会の中で共有しておきたい。

【事務局】 「映像」の範囲は「動画」と考えている。

【津嶋委員】 前回の会議資料では、施策展開に向けた九つの視点がばらばらに記載されていて、少しわかりにくかった。今回の資料では、それぞれの分野で再整理され、議論がしやすくなったと思う。

計画の進捗・効果を計る指標についても、新しく追加された指標は妥当だと考える。後は具体的な施策、アイデアをどれだけ出せるかといったことを考えていきたい。

【中島委員】 前回の会議で説明があった映画「鏡の中の笑顔たち」と「風の色」について、具体的にどのような支援を行ったのか、また、市としてどのような効果があったと考えているのかお聞きしたい。

【事務局】 両作品とも、札幌市映像制作助成金を活用して制作された映画である。映画「鏡の中の笑顔たち」では、主演の白石さんと夏菜さんと一緒に、札幌市役所内で公開記念記者会見を実施したり、劇場販売用パンフレットに掲載する写真を市民から募集するなどの取組を行った。

映画「風の色」に関しては、中国マーケットを意識した作品。映画が公開された際の波及効果で中国人観光客が増えることを期待しているところ。両作品とも札幌市のシティプロモートとして一定の効果があったものと考えている。

【中島委員】 北海道全体で作品を誘致していくという方向性は正しいと思う。ただ札幌は、道内ロケの映画であったとしても、それほど盛り上がりせず、集客の宣伝が難しいといった点が課題としてある。

一つ好例として挙げたいのは、七、八年前に札幌市が招聘した中国人作家の莫言（ばく・げん）氏の事例。札幌市が莫言氏を招聘し、実際に道内を旅行してもらって、その様子を旅のエッセイにまとめてもらうといった企画だ。これは非常に大きなプロモーション効果があったと思う。

【伊藤委員】 札幌市映像制作助成金の年間予算額はどれくらいなのかをお聞きしたい。

【事務局】 予算額は3,000万円である。上限額の300万円に満たないケースもあるので10本以上の作品に支援を行うこともある。

【伊藤委員】 副委員長にお聞きしたいが、例えば1時間の情報番組を作ったとして、どれくらいの金額が必要になるのか。

【津嶋委員】 30分番組で200万円という場合もあるし、100万円の場合もある。さらにコストを縮減するのであれば、ディレクターとカメラの2人で、数十万円で作ることも可能。取材期間の長さや特機の使用の有無、映像へのこだわりなどで変わってくる。

【伊藤委員】 一般論で言うと、300万円を上限に助成するというのは十分な金額と考えてよいのか。

【津嶋委員】 1時間番組を300万円で作ることは可能だと思う。ただ、金額に関しては、まさしくクリエイティブな分野で、一概に標準金額がいくらなのかを示すことは難しい。

【樋泉委員】 昨年、この助成金を活用して制作したドラマ「UBASUTE」は、今年の東京ドラマアウォードのローカル部門でグランプリを取った。300万円が妥当かどうかはわからないが、インセンティブがあることで、作品を作りやすいということは事実だ。このドラマは、報道記者が脚本を作っていて、こうした積み重ねが、

制作能力、表現力を上げていくことになるのだと思う。

ドラマ制作自体は赤字だが、社内の人材育成の点からも、継続していききたい取組である。

【中島委員】 前回の会議では、脚本の問題が提起されたと思うが、道内には素晴らしいスタッフ、キャストがいると思う。ただ、脚本の力は弱いといった点が課題だ。

函館市民の力で作った映画「海炭市叙景」と「そのみにて光輝く」は素晴らしい出来で大きな力になっているが、脚本は東京のプロが書いている。地元の人間が脚本を作る力をつけていく必要があると感じている。

【伊藤委員】 300万円という金額が多いのか、少ないのか、資料だけでは判断が難しい。

【津嶋委員】 番組の種類によっても異なる。一番安く作れるのは情報番組。一般的には、情報番組、ドキュメンタリー、ドラマ、映画の順で制作費が高くなっていく。

【樋泉委員】 ドラマ制作には、ものづくりの原点が多く潜んでいる。今回の「UBASUTE」もドキュメンタリーを作ってきた報道記者がドラマ制作にチャレンジすることで、映像の表現力を上げる意味で非常に効果があったと思う。

それから、こうした取組を継続することで、ドラマ制作をしたい、会社に入りたいという学生が全国から集まってくるといった効果も出ている。

【伊藤委員】 映画に比べるとドラマは効果がなかなか見えにくい部分があるのではないかな。映画のように興行といったわかりやすい指標がない。シティプロモートを意識した場合、作品をどのように放送・公開していくかという点については、工夫が必要になるのではないかな。

【樋泉委員】 ドラマには普遍性がある。それは世界中に共通するテーマを有しているということ。海外に販売する場合、ドラマが一番売りやすいのではないかな。海外に売出す時の拡張性や普遍性をドラマは持っていると思う。その結果として、札幌の魅力を紹介することにもなるし、さまざまな波及効果をもたらすことにつながっていくことになる。

【伊藤委員】 放送コンテンツの難しさは、市民が共有できる機会が少ないという点だ。収益性などを考慮すると、ゴールデンタイムに「UBASUTE」を放送して市民に見てもらおうということは困難ではないかなと思う。そうするとせっかくいい取組をしているのに、市民が共有できない面がある。

【樋泉委員】 ビデオ・オン・デマンドがある。当社のドラマ作品は有料で全てネットで見られる状況になっている。環境的にはネット配信がどんどん進んでいるし、海外では特にその傾向が顕著である。そういう意味では、きちんとメッセージ性のあるものを作れば、それを見る人はオン・デマンド型で見られる環境が整ってきている。

【中島委員】 東海テレビは、放送コンテンツを映画館で流す取組を一生懸命やっている。映画館のネットワークは道内にもあるので、放送コンテンツを道内限定で上映するといったこともできるのではないかな。行政・興行・映像制作者が一緒になって発信するという方法もあるのではないかな。

【樋泉委員】 出口のプラットホームは無尽蔵にある。映画館もその出口の一つ。当社のドラマは4Kで制作している。これは最終的には映画館でも見られるようにするためだ。映像は後々の時代に残っていく資産で、そういう意味では長期的な投資であるとも言える。

ただ、プラットホームはあったとしても、実際に物を作る力がなければ意味がない。長期的な視点での人材育成が必要だと思う。

【伊藤委員】 この5年で映像を取り巻く環境は本当に大きく変わっていくと思う。この先の5年を考えた時に、重点的に投資していくポイント、現状の課題点があればお聞きしたい。

【樋泉委員】 プラットホームや技術は一定のレベルに到達している。つまり環境は整っていると思う。大事なことは表現力、伝える力を養うこと。特に海外に向けた発信力はまだまだ不十分だと感じる。

放送分野では、ネット配信が本格的に始まっていて、放送と通信は、今後確実に融合していく。このような環境の変化に適応した「ものづくり」、「発信力」を持つ人材を育てられるかどうかではないか。

【中島委員】 やはり人材が大事で、人材の誘致・育成を両方進めていくべきだ。海外の人達を北海道に招いて、実際に体験してもらうことは非常に効果がある。発信も大事だが、人を呼ぶ、招くことも大きな力になると思う。

例は違うかもしれないが、山形の国際ドキュメンタリー映画祭の一番の特徴は、1億円近い予算の半分近くを世界の作家を呼ぶことに使っていることだ。そうすることによって、山形の映画祭はドキュメンタリーを大切にしている素晴らしい映画祭だということを、招待した作家自身が発信してくれている。

それから映画会が抱える課題として映像の保存問題がある。映画はDCP（デジタルシネマパッケージ）で上映しているが、このシステムのバージョンアップが必要で、これは保存している映像素材にも必要なこと。バージョンアップ費用を誰が負担するのか、今後その問題が大きくなっていくのではないかと感じている。

【伊藤委員】 人材育成の話が出たので、ここで若い鈴木委員にお話をお聞きしたい。

【鈴木委員】 映画関係で働きたいが、まずは身近にいるプロデューサーに話を聞いたり、調べていくことから始めたい。情報収集が就職につながると考えている。

【伊藤委員】 どういう情報があればいいと思うか。

【鈴木委員】 求めている情報は、自分が目指す仕事がどこで実現されるのかということで、プロデューサーの話が聞けるのであれば、実際に話を聞きに行きたいと思う。

【山野委員】 お話を聞いていて、札幌市からの発信、将来に向けた環境整備、人材育成という三点がポイントになると感じた。それを具体的にどういう風にやっていくのかということだと思う。

私が以前に関わった韓国映画「おいしいマン」では地元の巻き込みを意識した。この映画は紋別で撮影された作品だが、例えば、地元漁協のおばさん達にエキス

トラで出演してもらったり、ケータリングで食事を作ってもらった。また、撮影隊を地元の学生達に取材させて、その取材で得た情報を学生達が自分で記事にして発信するという取組も行った。

こうした取組というのは、人材育成にもなるし、お金をかけない発信になるのではないか。それから、人材育成で思うことは、札幌市立大学で映像学科が作れないかということだ。映像学科があれば、海外と連携した人材交流も可能になるし、新しい化学反応が期待できる。

環境整備については、国を動かして法律を変えるということは難しいと思うが、撮影しやすい環境作りをしていく余地はまだある。

【伊藤委員】 紋別と比べると札幌は街の規模が大きい。そうした街の規模の違いによる工夫があればお聞きしたい。

【山野委員】 以前に関わった映画「探偵はBARにいる」では、BARを回りながら謎解きをするというスタンプラリーを企画した。こうした地域を巻き込んでいくような仕掛けの積み重ねが大切だ。

【伊藤委員】 今の話は、プロデューサーであるとか、イベントの企画といった仕事に近いと思う。こうしたプロデューサー能力のようなものは、個人的な能力によるところが大きいと思うが、こうしたプロデューサーを組織的・体系的に育てていくためにはどうしたらよいと思うか。

【山野委員】 映像関係のワークショップは少ないので、そういうところで動機づけを行うといった方法も一つだと思う。

【伊藤委員】 行政や学校が実施するワークショップは基本的に平日の昼間であるとか、週末の集中講座形式であったりとか、仕事がある人がスキルアップのために、参加できる仕組みにはなっていないことが多い。人材育成を考えるのであれば、やり方にも工夫が必要かもしれない。

【樋泉委員】 映像系では若手の人材が不足していて、東京でスカウトしているという状況になっている。映像づくり離れがその根底にあると思うが、企業としては、できれば地域の中で人材を確保したい。ワークショップはその一つの契機になり得ると思う。ただ、受け皿が課題で、そこにミスマッチがある。雇用の全体の量が決まっているので、全てを賄うことはできないが、安定的な雇用の場を作っていくことが大切だと感じている。

【伊藤委員】 これは、あるアニメ制作会社の例だが、優秀な学生を毎年一定数採用しており、雇用や将来性の面で非常に期待している会社なのだが、実態を聞くと問題があることがわかってきた。驚いたことは、4月1日で採用された新卒者の最初の3か月の給料が「研修」扱いで無給であることだ。映画やアニメが徒弟制の厳しい世界は事実だが、昔とは学生や親の感覚も違うし、社会状況も異なる。いくらその仕事が好きだと言っても根性論だけではどうにもならない部分がある。ただ、雇用する企業の言い分もあるので、なかなか難しいところだ。例えば、こうした雇用のスタート部分を行政が支援するといった仕組みがあっても良いかもしれない。

い。

(4) 総括

【伊藤委員】 「市民の創造的な活動の促進」、「まちの魅力の再発見」などのテーマは議論できなかったので、次回の会議の積み残しとしたい。

(5) 事務局からの連絡事項

次回の会議は、各委員と日程調整のうえ、開催日を決定する旨を各委員に連絡した。

(6) 閉会